

れる理由も、たぶんぼくにはわかっていた。ひと月前に、おじいちゃんが死んだのだ。

うちは両親とぼくにおじいちゃんの、四人家族だった。

おじいちゃんがいっしょに住むようになったのはぼくがまだ幼稚園児のころで、何かややこしい事情があったのは幼いぼくにも薄々わかった。というのも、おじいちゃんが来てから家の中がみるみるぎくしゃくし始めたからだ。おじいちゃんは気難しくて、いつもいらいらしていて、おとうさんを名前できつく呼びつけたり、ごほんのたびにほかあさんの料理に文句を言ったりした。なかのいいおとうさんとおかあさんが何か言いあうのをぼくは何度も見たし、おとうさんは、おとうさんのおとうさんなのに、おじいちゃんとはとんど口をきかなくなつた。家の中で一番えらいのがおとうさんじゃなくなつたのがくやしかったのかもしれない。おじいちゃんと話をしないのは、ぼくもおなじだった。おじいちゃんは、よその家のおじいちゃんみたいにいっしょに遊んだりおこづかいをくれたりはしなかった。おじいちゃんの部屋は二階にあり、ぼくの部屋も二階なのだけど、ぼくは、おじいちゃんの部屋に一度も入ったことはなかった。夜、耳をすますと、おじいちゃんの部屋からせきをする声やひとりごとの声が聞こえた。ひとりごとと聞きには、ぼくはこわくてぞっとふるえ上がった。なぜなら、

それは下で話すときのとげとげしいのとはぜんぜん別の、静かな声だったからだ。

おじいちゃんは外へ出かけることはほとんどなかったけれど、大きな病気をしたことはなく、きげんは悪くても身体はおおむね元気だった。だから、ある日の朝おじいちゃんがトイレで倒れ、そのまま意識がもどらず死んでしまったときには、ぼくはすっかり驚いてしまった。もっと驚いたのは、お葬式のとき、おとうさんやおかあさんが泣いたことだ。おかあさんは優しい人なので泣いても不思議はなかったけれど、おたがいにほとんど口もきかなかったおとうさんまでがハンカチを目にあてていたのは意外だった。おじいちゃんとおとうさんは、ほんとうはなかよしだったのかもしれない。遠くから来た親せきの人たちもみな泣いていて、ぼくは、ぼくひとりだけが仲間はずれになつたような気がした。ぼくは、お葬式のあいだじゅう、なみだがひとつぶも出なかつたのだ。悲しくなかつたわけじゃない。じゃあ悲しかったのかというと、それもなんだかはっきりしない。おじいちゃんの写真は、お葬式のときも、それから、そのあとずっと今日まで、ぼくをにらんでいる。でも、相手が写真なので、ぼくはそんなに気まずくはなかつた。いや、ほんとうは気にしていたのかもわからない。だから、自動幽霊販売機なんかに出会つたりしたのかも。